

原点から思考する

デダロ・ミノッセ国際建築賞

——第1回日本巡回展記念講演会

デダロ・ミノッセ国際建築賞は、1997年に北イタリアのヴィツェンツァで設立された国際的な建築賞で、イタリアでは最も知名度の高い賞として知られています。「優れた建築には良き発注者と素晴らしい建築家の双方の存在が必要である」という理念のもと、選ばれた作品には建築家だけでなく発注者にも賞が授与されるという、世界でも類い希な建築賞となっています。

そのデダロ・ミノッセ国際建築賞の受賞作品を紹介する日本初の巡回展が2015年11月より翌年の1月にかけて開催され（ASJ YOKOHAMA CELL、ASJ UMEDA CELL）、同展開催を記念しての講演会が2015年12月11日に東京・九段のイタリア文化会館にて行われました。以下に、その講演会の模様を紹介いたします。まずは主催団体であるALA建築協会を代表して来日されたマルチェッラ・ガッピアーニ氏から、本建築賞の概要と意義が語られました。次いで、「原点から思考する」をメイン・テーマとした講演が、歴代の受賞者である窪田勝文、岡田哲史、前田圭介の3氏によって行われました。

書名：『A-Collection 021』
発行者：アーキテクト・スタジオ・ジャパン株式会社
発行日：2016年4月

マルチェッラ・ガッピアーニ | Marcella Gabbiani
建築家。ALA建築協会ディレクター。

デダロ・ミノッセ国際建築賞は1997年より始まり、隔年に開催されてきています。来たる2017年には設立20周年を迎え、10回目の開催となります。その受賞展はアメリカやヨーロッパを巡回するまでに発展し、今回ついに日本での開催も実現することとなりました。

ここで手短かに、デダロ・ミノッセ国際建築賞が誕生した理由と歴史をお話します。この賞は、私たちALA建築協会の建築家とエンジニアたちが、イタリアにおける建築のクオリティを高めるために創設したものです。具体的な方策として、まず私たちは国内だけでなく海外の作品を含めて意欲的に比較対照しました。そして考えたのは、世の中に建築賞は多いものの、もう1人の立役者が見逃されているということでした。つまり建築の質には、建築家とともに施主が大きな存在なのではないか。よい施主なくしては建築家の技量も生かされないし、建築家だけが賞賛されることには価値がな

【2013/14年度デダロ・ミノッセ国際建築賞】

- 01 テアトロ・オリンピコで開催された授賞式 | 2014年10月31日
- 02 同、各賞授与式。右から4番目がマルチェッラ・ガッピアーニ氏
- 03 国際建築賞 | ポール・デ・ロイター・アーキテクト
- 04 ALA建築協会賞 | パーク・アツチャティ、チノ・ズッキ・アルキテッティ
- 05 国際建築賞・40歳未満の部 | エマニュエル・ムホー
- 06 ALA建築協会賞・40歳未満の部 | ヌンツィオ・ガブリエーレ・シヴェレス

いと考えたのです。また当然ながら、施工業者も建築の質の決定的な存在としてあります。許認可や決済を下す国や地方の行政体も——マイナス要因となることもしばしばありますが——、建物の仕上がりに大きく関わっています。

〈デダロ・ミノッセ〉という名称は、ギリシア神話に出てくるダイダロスとミノスからきています。つまり建築家と施主ですね。クレタ島の王であるミノスは、建築家のダイダロスにラビリント／迷宮の設計を依頼します。その内部に残忍かつ身体半分が牛という化け物のような息子・ミノタウロスに幽閉します。この話には数多くのバージョンがありますが、この2人の間に存在する力関係は、私たち建築家にとっては自虐的なものでもあります。つまり最終的にミノス（発注者＝施主）はダイダロス（建築家）を殺害しようとする結末にまで至るのですからね。いずれにせよ優れた建築には建築家と施主の双方が必要であるとする〈デダロ・ミノッセ〉の理念は、すぐに世界中から関心と共感を集めました。プリツカー賞を受賞した建築家——例えばリチャード・マイヤー、ザハ・ハジド、ハンス・ホライン——の施主からの応募もあります。これはデダロ・ミノッセ国際建築賞の成功を証明しているとも言えるでしょう。さらには本日の会場であるイタリア文化会館を設計したガエ・アウレンティの施主も応募してきています。

これまでに約100ヶ国から4,000件を超える作品がデダロ・ミノッセ賞に応募されてきました。応募は無料ですが、受賞作品の建築家と施主に授与されるのも、銀の銘板2枚のみです。審査員はさまざまな分野の専門家と構成されています。建築家だけではなく、審査員団にはジャーナリストや企業家も含まれています。審査において特に重視するのは、作品の社会的持続性や経済的持続性、またデザイン・フォー・オールの考え方に基づくデザイン、とりどりの景観の活用、新しい技術や資源の活用、そして何よりも、多様な分野の専門技術を活用するというアプローチです。

主要な賞は大きく4種類に分かれています。まずはデダロ・ミノッセ国際建築賞グランプリです。次に40歳未満の若手建築家に与えられる賞があります。さらにALA建築協会賞として、グランプリと40歳未満のイタリア人建築家に対する賞があります。授賞式はヴィツェンツァで開かれます。ここは小さな町ですが、建築においては非常に重要な場所になります。何と言ってもパツラーディオの町ですから。授賞式には1,000人を超える施主や建築家たちが集まります。この機会に合わせて、作品展やシンポジウムなどのイベントが数



02

多く行われます。その後に世界巡回展に出て行くわけですね。その巡回先でも、今回の講演会のようにさまざまな催しが行われます。これが非常に貴重な建築や文化に関する意見の交換の場ともなっています。もちろんイタリア国内でも展覧会が開催されます。もともと私たちALA建築協会はイタリア全土に根ざしている協会ですからね。

2017年には第10回デダロ・ミノッセ賞が開催されます。日本から数多くの応募が寄せられることを期待し、ぜひ皆様とヴィツェンツァで再会できることを祈っています。



03



04



05



06



01



07

岡田哲史 | Satoshi Okada

2005/2006 年度デダロ・ミノッセ国際建築賞グランプリ。
2007/2008 年度同賞審査員。

私のイタリアとの関係のはじまりは、今から約4半世紀前までさかのぼります。大学の博士課程に在籍していた当時、18世紀イタリアの銅版画家として著名な建築家ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージを機軸として建築における近代主義の端緒をめぐり10年ほど研究していました。それをもとに学位論文を書いたり、本を執筆したりもしましたが、そうした活動を行っているあいだに設計実務の仕事も徐々にスタートさせていました。2作目を完成させた1997年には、旧イタリア文化会館（リニューアルされる以前の建物）の大ホールで、日伊文化交流事業として「イル・コラジジオ・デッレ・イマージニ（イメージーションにかける勇氣）」というタイトルのコンファレンスが開催され、そのパネリストの一人として招聘されました。コーディネーターは陣内秀信先生、日本側からは隈研吾さんと私でした。他方、イタリア側からは建築家のフランコ・プリーニさんを始め、哲学／思想や美学理論を専門とされる学者が数名来日され、そこで交わされた興味深い議論が昨日のこのように思い出されます。2002年には建築誌『CASABELLA』の編集長であるフランチェスコ・ダルコ氏のお招きで、ヴィツェンツァにあるバシリカ・パラディアーナの大きなホールで450人を前に講演しました。2010年以降は客員教授としてヴェネツィア建築大学（IUAV）で建築デザインを教えたり、ローマ大学サピエンツァ校の博士課程で建築思想／理論の集中ゼミナールの講師をしたり、ミラノ・トリエンナーレやヴェネツィア・ビエンナーレ関連の建築展覧会に出品参加するなど、イタリアとは設計実務と教育の両面でいまなお交流が続いています。

デダロ・ミノッセ国際建築賞との関係は、2005/06年の第6回でグランプリをいただいたことに始まります。当の授賞式には都合により出席できませんでしたが、私の代わりにミラノから日本総領事が駆けつけてくださり、施主と共に賞をいただきました。授賞式には枢機卿も参列されますから、この賞がイタリアでどれほど大切にされているかがわかります。

グランプリ受賞者は次回の国際審査員として招かれます。2007/2008年の第7回の審査に携わりましたので、ここではその経験談をお話します。審査会は朝の9時から夜の11時までホテルの一室に缶詰状態で丸一日をかけて受賞対象者を決めていきます。それが終わったら審査会の打ち上げを兼

ねて深夜のディナーに繰り出し、ホテルに帰ったのは夜中の3時頃だったでしょうか……。何とも過酷な一日でした。しかし逆から見れば、それほどまでに厳密かつ厳粛に、世界中から送られてくる作品を喧々諤々の議論を交わしながら受賞者を決めていくのです。その審査プロセスを実体験した一人として、この賞が公平かつ真摯な審査プロセスを経て生まれていることを証言しておきます。私が審査に携わった回では、プリツカー賞受賞者のリチャード・マイヤー氏がグランプリ、マリオ・ボッタ氏が名誉賞をそれぞれ授与されました。このことは今日デダロ・ミノッセ国際建築賞が建築界のグローバル・アワード最高ランクのひとつとして定着した証でもあります。式典はパッラーディオの手になるテアトロ・オリンピコの舞台上で華やかに執り行われました。

私の話の締めくくりとして、この国際建築賞が自分の建築家人生に与えた影響について触れておきたいと思います。受



08

07 講演中の岡田哲史氏
08-11 清里アートギャラリー | 2005/2006 年度同賞グランプリ

賞する前は、一建築家としてとにかく最高の建築を創ろうと、そればかり躍起になっていました。ところがデダロ・ミノッセ国際建築賞のグランプリ受賞をきっかけに、数多くの素晴らしい方々と巡り会うようになり——それは今も続いているのですが——、そうした考えが私のなかで少しずつ変わっていきました。優れた建築をつくることは実は自分の最終目標ではないということ。それがわかってきたのです。建築家として「優れた建築をつくること」は当然の目標としてあってもいいのですが、その先にもうひとつ何かがあることに気づかされたのです。それは、世界中の素晴らしい人々との出会いであり、その方々と楽しい時間を一緒に過ごすこと、そうした豊かな時間や空間を享受すること。それがかりに最終の到達点であるとすれば、私の持てる建築家としての職能は目的ではなく手段にすぎないということ。私にとっての「建築の原点」とは、その気づきにこそあると思うのです。



09



10



12 講演中の前田圭介氏
13-14 内海の家 | 2005/2006 年度同賞審査員特別賞
15-16 ホロコースト記念館 | 2007/2008 年度同賞・40 歳未満の部・グランプリ
17-18 Peanuts、つくし保育園 0 歳児乳児棟



前田圭介 | Keisuke Maeda

2005/2006 年度デダロ・ミノッセ国際建築賞審査員特別賞。
2007/2008 年度同賞・40 歳未満の部・グランプリ。

デダロ・ミノッセ国際建築賞は、素晴らしい建築は素晴らしい施主との協同から生まれるというコンセプトを打ち出しています。それに加えて、ガッピアーニさんも少し述べられましたように、そこには施工者という作り手の腕も重要だろろうと思っています。それは私自身が大学卒業後に現場監督を経験してから、建築家として独立したことに関係します。ものづくりの世界に 5 年ほど身をおいて設計者や施主を客観的に見る立場から考えてみると、その三者一体という進め方がすごく重要なのではないかと思えたからです。

2005/2006 年度に「内海の家」で審査員特別賞を、2007/2008 年度には「ホロコースト記念館」で 40 歳未満の部でグランプリを受賞しました。その授賞式でヴィツェンツァという町を初めて訪れました。パッラーディオ建築の町ということは知っていましたが、やはり実際も素敵な町でした。そのパッラーディオのテアトロ・オリニコという 500 年も前の古い建物で表彰されることは、もちろん初めてで感動し、時間を経た建物を現代の人が使い続けていることの素晴らしさを体感しました。授賞式は一般市民にも開放されていて、建築に興味を持っている町の人たちが見にくるという文化は本当に素晴らしいと思いました。私自身が活動の拠点にしている広島県福山市は、もちろん首都でも県庁所在地でもない地域です。そういう意味ではヴィツェンツァも同じ地方都市ですね。もちろん歴史や風景は違いますが、福山市も武田五一や藤井厚二といった建築家を輩出している建築にゆかりのある町でもあるのです。そんな福山を人に慕われ愛されるヴィツェンツァのようにしたいと、実際に訪れて強く思いました。

「素晴らしいクライアントがいるから、素晴らしい建築ができる」という観点から紹介したいプロジェクトがあります。

つくし保育園は 40 年程前に開園し、増改築を繰り返して現在に至っています。この保育園は、私の息子を通わせる所を探しているときに出会いました。ここは、最近では少なくなった土いじりのような自然と触れ合うことを考えた保育をしていました。例えば夏が過ぎてプールを終える時には、園児たちは朝からウナギについて学び、その後プールに放たれたウナギを捕まえます。そして捕まえたら先生たちと一緒に捌き、炭火で焼いて食べる。自分たち人間が自然環境の中で

